

「な、なな…何なのよ、あんた…？」

トリステイン魔法学院の生徒の一人——ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは目の前の光景に、頬をひくつかせた。

彼女は二年生に進級するため使い魔召喚の儀を行っていた。他の生徒はすでに召喚を終え、後はルイズの召喚を待つだけだった。

だが、彼女が魔法を発動しようとするとは何か爆発を発生させ、ことごとく失敗した。

唱えても唱えても爆発の連続。

今日に限った話ではなく、彼女は今まで魔法を成功させたことが一度もないのだ。"魔法の成功率ゼロ"から、周りの生徒に『ゼロのルイズ』と皮肉を込められたあだ名をつけられてしまったのだ。

そして、今日の使い魔召喚も成功できずに終わると思われた。

だが、これが最後という想いで唱えた『サモン・サーヴァント』がついに爆発以外の形で発動させた。

充満する土煙に何かの影が見え、ルイズは喜びに打ち震えた。竜なのか、亜人なのか、幻獣なのかはわからない。だが、成功させたことに変わりはなく、ルイズは期待に胸を膨らませながら土煙が晴れるのを待った。

そして、絶望した。

そこに立っていたのは、人間だった。

中年の男だった。

太っていた。

スキンヘッドだった。

全裸だった。

「ミスタ・コルベール、やり直しさせてください。」

「そ、そうだね、ミス・ヴァリエール…」

無感情な表情と声でそう言われ、禿げ頭の教師コルベールはさすがに彼女の言葉を受け入れるしかなかった。

ヒラガでサイト的な少年だったならば、あれこれ理由をつけてルイズに我慢してもらって、使い魔にさせていたことだろう。

だが、召喚されたのがオーク鬼に酷似した、全裸でデブのおっさんだ。これで我慢しろと言えるほど、コルベールは鬼ではない。「じゃあ、ミス・ヴァリエール。もう一度——」

次の瞬間、中年男が指を弾き鳴らした。

甲高い音が広場中に響き渡ると、

「いや、やはりダメだ。ミス・ヴァリエール」

突然、手の平を返したように前言撤回するコルベール。先程まで戸惑っていた表情を浮かべていたが、今は有無を言わさぬ厳しい顔つきでルイズを見据える。

「使い魔召喚は神聖な儀式なのだ、やり直しは利かない。君が好むと好まざるとに関わらず、彼を使い魔にするしかない」

年頃の少女に対して、あまりにも残酷な言葉。本来であればルイズは世界を敵に回してでも拒否するところなのだが、

「…そうですね。わかりました」

不思議なことに、渋々ながらもあっさりと了承した。

彼女たちだけではない。中年男を見て、悲鳴をあげたり、げらげらと笑い転げていた生徒たちも何事も無かったかのようにルイズたちのやり取りを見つめている。

「あなた、感謝しなさいよね」

ルイズは裸の中年男に何の抵抗もなくツカツカと歩み寄る。

「貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

そして、次に彼女の口から出た言葉は驚くべきものだった。

「今からあなたに『コントラクト・サーヴァント』——逆レイブペロチューするわ。あなたをチンポ奴隷使い魔にさせるための契約の魔法よ。私の唇と舌と、トロットロの唾液であんたを屈服させて、私がご主人様だってことをわからせてあげる。…ほら、屈みなさい。あなたに私のファーストキスを捧げてあげる」

事もなげにそう言い放つルイズ。

一方、中年男は16歳の美少女からのディーブキスを拒む理由などなく、鼻息を荒くしながらルイズに顔を近付けた。男の裸体から香る加齢臭の独特の匂いを感じながら、ルイズは杖を振った。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・チンコ・キ・ピッチ・ヴァリエール。五つの力を司るチンタゴン。この者に極上の快感を与え、私のマンコキ使い魔となせ」

そう唱えた瞬間、ルイズは杖を放り投げて中年男の首に腕を回し、何の躊躇いもなく唇にしゃぶりついた。

「んっ、ぶちゅっ！　ちゅぶっ、じゅぶうっ！　はっ、ちゅばっ！　ちゅばっ！　じゅるるっ！」
初めてとは思えないほどの苛烈なキスの雨。

鼻の穴を大きく膨らませ、ふうーッ！　ふうーッ！　と激しい鼻息をしながらルイズは中年男の唇を食った。口の中に舌をねじ込み、男の舌を捉え、レロレロと絡め合う。

一方、中年男は16歳少女の唾液の味を楽しみながらスカートの中に手を入れた。

ルイズは他の女子生徒と比べて、細身で小柄だ。それ故、胸の大きさは若干乏しい。だが、尻は別だ。しっかりと脂が乗っており、丸みを帯び、ツンと上向きになっている。安産型の良い尻だ。

男の大きな手がルイズの豊かな尻たぶに絡みつき、好き勝手に揉みまくる。

だが、ルイズは払い除けることなどせず、中年男と淫らな接吻行為を続ける。

「ぶちゅっ！　ぶちゅっ！　ほらっ、もっと舌を突き出さない！　ちゅばっ、ちゅばっ！　ちゃんと唾液飲んで！　ふんっ、ちゅぶっ！　ぶちゅっ！」

口元を自身と中年男の唾液で汚しながらルイズは何度も顔の角度を変え、強く唇を押し付ける。

（このおっさんの涎、美味しいけどくっさ…！　豚小屋みたいな匂いね…！）

鼻をひくつかせながら、心の中で毒づく。

（だけど、『コントラクト・サーヴァント』のペロチューは最低でも一時間以上はしないといけないし、私の涎で匂いを塗り替えてやるわ…！）

悪臭を放つ中年男の唾液を、ルイズは頬をすぼめて一気に吸引した。

じゅるるるるるるッ！！　と音を立てるように吸い込み、食道へ飲み下すと鼻から抜ける生臭い匂いに一瞬間をしかめる。

だが、口と舌の動きは止まらない。男の口内を消臭するように、小さな舌を縦横無尽に躍動させる。

「ちゅばっ、ちゅばっ！　はあッ、ちゅッ、ちゅぶッ！　んう、ちゅぶッ！　ぶちゅッ！」

ルイズの舌が中年男の黄ばんだ歯、歯茎、口底、硬口蓋など、口内の隅々まで舐め回しながら唾液を塗り込んでいく。

その間、激しい鼻呼吸を繰り返して、中年男の顔に16歳少女特有の甘い鼻息を吹きかける。その香りを吸い込むように、男も鼻息が荒くなる。

16歳美少女と、50代肥満体全裸男との激しく濃厚なディープリキスをすると異様な光景。

だが、コルベールを初め、周囲の生徒たちは淡々と見つめていた。一部の生徒がいつもの調子で早くしろよと野次を飛ばすことはあっても、何も不思議がることはない。

ルイズはただ、使い魔と契約するための魔法を行使しているだけなのだから。

「んっ、ちゅばっ！　ふうんッ！　じゅるるッ、じゅるるるるッ！　ぱちゅッ、ぶちゅッ、じゅるッ！　れろれろッ！」

濃厚な接吻は激しさを増し、貴族の少女は中年男と舌を絡めながら股間に手を伸ばした。

触れたのは、男の睾丸。ずっしりとした重みのある肉の玉を手の中でコリコリと転がしていくと、中年男が指を弾き鳴らした。すると、

(あれ…？ 私…何して…)

常識改変の催眠が解除され、眠りから覚めたのような感覚に陥るルイズ。

そして、意識がハッキリしてくると今の自分の状況を認識し始めた。

(…え…！？　ちょ、ちょっと待ってッ！？　何で！　何で私、このおっさんとキスしちゃってるのッ…！？)

目の前に広がるのは、太った中年男の蕩けた顔。

ギトギトに脂ぎった醜悪な男と唇を重ね、舌を絡め合っていたのだ。

(いやあああああああああああああああああああああッ…！！)

ルイズは心の中で絶叫をあげた。

(き、気持ち悪いッ…！　くっさいッ…！　おっさんの息、臭過ぎるッ…！　離れてッ…！　離れてよッ…！)

だが、身動きが取れず、男を突き飛ばすことも、逃げ出すこともできなかった。

中年男はルイズの意識しか催眠解除をしておらず、身体の動きは催眠にかけたままになっている。

ルイズの意思を無視し、口と舌は中年男とディーブキスをし、右手は絶妙な力加減で睾丸を揉み込む。

「ちゅばっ、ちゅっぱあ…ん、16歳処女の唾液、超うまつ。ちゅぶッ、ぶちゅッ、じゅるるるッ！」

「ふうーッ…！　ふうーッ…！　んふうーッ…！　ふうううーッ…！」

ルイズは鳶色の瞳に涙を浮かべ、憎悪を込めて中年男を睨みつけた。舌を絡め合い、唾液を交換しながら。

(こんの豚平民ッ…！　絶対、絶対許さないんだからッ…！！)

そう思うルイズだが、

「ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！」

顔が勝手に動き、中年男を睨みながら何度も唇にしゃぶりつく。

今にも刺し殺さんばかりの怒りの表情を浮かべるルイズだが、中年男の余裕の笑みは消えない。

「怖い顔だね、れろっれろっれろっ！　それじゃあ服を脱いでもらおうか。あつ、ちなみに周りの人たちも催眠かかっているから助けを求めても

無駄だよ？」

「ちゅばっ…この、ド変態…！！！」

口元を唾液で汚しながらルイズは毒づいた。

中年男を睨みながらも手が勝手に動き、服を脱ぎ始める。マントを外し、ブラウスのボタンをぶち…ぶち…と外していく。

自分の意思に反してブラウスを脱ぎ捨てながら、ルイズは視線だけ周りを見渡した。

突然脱衣を始めているにも関わらず、教師コルベールや周りの生徒たちは誰一人何の反応も示していない。

催眠をかけているのは嘘ではないようだ。現にルイズ自身も、中年男とキスするまでの記憶が全くなく、気が付いたら舌を絡め合っていたのだ。

「くっ…」

キャミソールを脱ぎ、次はスカートのホックを外した。

ファスナーを引き下ろし、スカートがすとんと地面に落ちる。

「……………」

そこでルイズの手の動きが止まった。

ショーツと黒のニーソックス、ローファーを残したまま腕がだらりと下がる。多くの人たちの前で晒された胸を隠したくても、指一つ動かさずにいた。

「ぐふふ…可愛い胸だね、ルイズちゃん」

中年男は鼻息を荒くしながら、ルイズの小さな胸を間近で視姦した。

スレンダーな体型故、乳房の膨らみも小振りだが、思わず愛でたくなるような魅力に溢れている。さらに乳房の先には一切黒ずんでいない、綺麗なピンク色の乳首がぷっくりと膨らんでいる。

「気色悪いのよ、豚…！ ジロジロ見てんじゃないわよ…！」

胸に生暖かい息を感じながらルイズは罵声を浴びせた。だが、中年男は全く意に介さず、今度は後ろに回る。

「胸は小さいのに、なんだこのデカイ尻は？」

ショーツに包まれた、ルイズの豊満な尻を見つめる。果汁がたっぷり詰まっていそうな桃尻——90cmジャストの肉厚ヒップだ。

その巨大な肉の塊に向かって、中年男は顔を埋めた。

「むふう、たまらんっ！ すう、ふう…すう、ふう…」

「くっ…！ この…！！」

ショーツ越しとはいえ、尻の谷間に顔を押しつけながら匂いを嗅がれ、ルイズは怒りで顔を歪ませた。

「いい加減にしなさいよ、豚ッ…！ 絶対に殺してやるわ、この下種ッ…！」

一切身体を動かさないため、怒鳴ることしかできなかった。

だが、それすらも興奮の材料にさせる中年男は嬉しそうに下卑た笑みを浮かべた。

「そんなこと言うとかは腋を嗅いじゃうぞ」

「くうッ……！」

ルイズの腕が勝手に動く。

腋の下を大きく広げ、肘を掴んでしっかりと固定する。

毛が一本も生えていないスベスベの腋に、中年男は鼻を近付けた。

「すうすう、ふうふう……。おほお……ルイズちゃんのロリ腋の匂い、最っ高〜！ すうーふうー、すうーふうー」

「くっ、息がくさい……！」

ルイズの腋から溢れる、レモンのような柑橘系の体臭に中年男は蕩けた表情を浮かべた。

そして、十分に匂いを堪能したところで次は味を確かめる。舌を伸ばし、16歳の美少女貴族の滑らかな腋を舐めしやぶる。

「じゅるるるるるるるッ！！ん〜、ルイズちゃんのロリ腋、甘酸っぱくて美味あ！ じゅぱッ！ じゅぱッ！ じゅぱッ！ じゅぱッ！」

「わ、腋を舐めるな、この豚ア！！くっ……ふうんッ……！」

無抵抗に腋を舐められ、小柄な身体をくねらせるルイズ。

セクシーな腋から分泌される甘味な腋汗に、中年男はふごふごと鼻息しながら舌鼓を打つ。

何十分もかけて、瑞々しい腋肉と香ばしい腋汗をしっかりと味見したところでようやく舌を放す。

そして、少女の幼い顔の前で中年男は舌を突き出し、ベロベロと波打たせた。

「ほくら、ルイズちゃんの大き好きなおじさんのベロだよ〜」

悪臭を放つ醜男の舌の匂いに、ルイズは露骨に顔をしかめた。

「あなたの口、ほんっつとにくっさいッ！！臭過ぎて鼻が曲がりそうよ！！何を食べたら、ここまで臭くできるの！？」

正直な感想をそのまま口にするルイズ。それでもなお、舌を突き出してくる中年男を睨みつけながらさらに罵倒する。

「顔も不細工で気持ち悪い！！身体全体ギットギトに脂ぎってて、デブでみっともない！！身も心も全部が気持ち悪いあなたの生きる価値な

んで、これっぽっちもないわ！！豚や牛の方がまだマシよ！！今すぐ首吊って死になさいよ、この豚ッ！！」

次の瞬間、中年男が再び指を弾き鳴らした。

「ちょっと何でベロチューをやめちゃうのよ！？『コントラクト・サーヴァント』やり直しじゃない！！」

再び催眠をかけられると、ルイズは全く別の理由で怒り始めた。

そして、ショーツの紐を掴み、勢いよく引き下ろす。

ヴァリエール公爵家の娘に見合った高級品の下着。瑞々しい少女の股間にずっと密着していたため、ほのかに温かい。そして、匂いが甘く、濃厚。

そのショーツを、先程から猛々しく勃起させている中年男の巨根に被せた。成人男性の平均サイズより大きめなペニスだが、先端が皮を被っている。

高級シルクのスベスベとした肌触りに、男は「おおぅ……!!」と呻き声をあげた。

「ほら、好きでしょ？ 16歳ヴァージンマンコにずっとぴっちり密着させていた、高級シルクショーツ」

悶える中年男の顔を見て、ルイズは勝ち誇った表情を浮かべた。

「脱ぎたてホカホカ……。おしつこと、昨日オナったときの愛液が混ざり合ったヴァージンマンコ臭……。その匂いが染み付いたショーツで……」
自分の下着に包まれたペニスをぎゅゅと握る。

「シコってあげる」

小さな手が上下する。

シュツッ！ シュツッ！ シュツッ！ シュツッ！

手コキをするなど初めてだというのに、その手付きは手慣れたものだった。

長く、太い竿を握り込んだ手が滑らかに上下運動を繰り返し、中年男の肉棒を抜いていく。

「おほっ！ パンツコキ、気持ち良い……!!」

喘ぐ中年男に、ルイズはぐぐつと顔を寄せた。鼻と鼻がくつつくほどに顔を近付けると、男の口臭が鼻腔を強烈に刺激する。

だが、ルイズはあえて中年男の口内の悪臭をくんくん嗅ぎながら言葉紡ぐ。

「もう一度『コントラクト・サーヴァント』するわよ。私の極上のキステクで、あんたを屈服させるわ」

男根を杖の代わりにし、ショーツに包まれた包茎巨根を抜きながらルイズは詠唱を開始した。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・プリプ・リマンコ・ヴァリエール。世界の羅針盤たるチンポ神。この者にザーメンチンポ奴隷としての祝福を与え、私のキツキツロリマンコを奉仕するチンポセックス使い魔となせ」

真摯な表情でそう唱え終えた瞬間、

「ぶっちゅッ……!!」

中年男の唇にむしゃぶりついた。

叩きつけるように唇を押しつけたため、唾液の飛沫が顔にかかってしまったが、ルイズは構わずに濃厚なディープキスを再開する。

「絶対に、ちゅッ！ ちゅッ！ 唇放すんじゃないわよッ！ ちゅぱッ！ ちゅぷうッ！ あんたを、ぶちゅッ！ れろっ！ 私のチンポ奴隷使

い魔に、ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　してやるんだからあッ！　れろッ！　れろッ！　れろッ！」

ルイズの手コキのスピードが加速する。滑らかな肌触りの高級シヨーツに包まれた肉棒を抜いて、扱いて、扱きまくる。シユッ！　シユッ！　シユッ！　シユッ！　シユッ！　シユッ！　シユッ！

激し過ぎるディープリキスと、高級シルクシヨーツを使ったハイスピード手コキに中年男は「んぶッ！！　んぶうッ！！」と悶え、何とかルイズの唇から逃れようとする。

しかし、ルイズのもう片方の腕が男の頭を強くロックして逃げられないようにした。

「じゅるるるるるッ！！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　じゅぱッ！　ぶちゅッ！　じゅるるるるるッ！！」

ルイズはシヨーツを被せたまま包茎ペニスの皮を剥いた。

大きな亀頭に恥垢がびっしりと付着しており、シヨーツ越しでも悪臭が漂ってくる。

(おっさんのチンカス、くっさ……！)

嗅覚がおかしくなりそうな感覚に陥りながら、ルイズは恥垢だらけの亀頭をぎゅっと握り、円を描くように擦り始めた。

「ごしゅッ！！　ごしゅッ！！　ごしゅッ！！　ごしゅッ！！　ごしゅッ！！　ごしゅッ！！　ごしゅッ！！」

恥垢を削り取り、亀頭を磨き上げるような強烈な摩擦。

脱ぎたてシヨーツの高級なスベスベ感も相まって、尿道から我慢汁がどぶどぶと溢れ、シルクの生地には吸収される。

それが潤滑油の代わりになってルイズの手淫の動きがより滑らかになる。

「ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！　ぶちゅッ！」

苦しげに悶える中年男の鼻息を嗅ぎながら、ルイズはサディスティックな表情で濃厚なキスの雨を降らせた。

その間小さな手による亀頭摩擦は激しさを増し、肥満体中年男を快楽の頂へ導いていく。

中年男から唇を放し、冷たい目で見下ろしながらルイズは一言呟いた。

「イけ、豚。」

親指を使って、裏筋を強く、一擦り。

その快感の一撃により、高級シヨーツに包まれながら中年男のペニスから精液が噴き上がった。

「ぶちゅッ！！　ぐびゅッ！！　ぶちゅるるるるッ！！」

シルクの生地がオス豚の体液を吸い込むが、量が夥しいため生地から溢れ、ルイズの手まで白濁色に汚していく。

「おほっ……おっ、ほ、おおっ……」

亀頭をぎゅっと握られ、中年男は射精しながら熱い息を吐いた。

「……………」

低い声で喘ぐ醜男の表情を、ルイズは息が当たるほどの至近距離でじっと眺める。

精液の生臭い匂いと、中年男の息がブレンドされ、とてつもない悪臭となって鼻腔の奥を強烈に刺激した。

「ふっ…くっさ…♡」

鼻の穴を大きく広げながら、ルイズはにやりと笑った。

そして、ペニスからショーツを放す。すっかりと濡れ、汚れてしまった高級シルクショーツから黄ばんだ精液がぼたぼたと粘つきながら地面に垂れていく。

それをバツと大きく広げると、ルイズは何の躊躇いもなく足に通した。

精液まみれのショーツが足首、ふくらはぎ、膝、太ももへとゆっくりと引き上げられていく。

そして、

ぐっちゅう…。

16歳の美少女の股間にぴっちりと密着した。

女性器と尻が精液で濡れるが、ルイズは全く意に介さない。パンツ抜きで射精させ、精液まみれのショーツを穿くことも『コントラクト・サーヴァント』の儀礼の一つなのだ。

中年男のこつてりとしたザーメンの温かさを感じながら、ルイズはコルベールに振り返った。

「終わりました、ミスタ・コルベール」

上半身は裸、身につけているものは黒いニーソックスとローファー、そして精液まみれの高級シルクショーツのみ。

口元を自身と中年男の唾液で汚したまま、ルイズは胸を張って報告した。

肥満体中年男を召喚し、巧みなディーブキスをしながら大きな包茎ペニスを抜きまくり、見事射精にて屈服させた。今まで魔法を成功させたことがなく、ゼロのルイズと揶揄されてきた彼女だが、その表情は自信に満ち溢れていた。

「うむ。おめでとう、ミス・ヴァリエール。見事な魔法だった」

コルベールも満足げに頷いた。進級が危ういと思われた生徒の成長に、教師として心から祝福した。

コルベールからのお祝いの言葉に、ルイズは頬を小さく綻ばせる。しかし、すぐに表情を引き締め、射精の余韻に浸っている中年男に振り返った。

「さあ、行くわよ豚。私の杖と脱いだ服を部屋まで持ってきてちょうだい」

ルイズは短く命じると、胸を張って校舎に向かって歩き始め、ショーツに包まれた豊満な尻たぶがたぶたと揺れた。

ルイズは中年男と共に女子寮にある自分の部屋へ入るなり、着用している精液まみれのショーツを脱ぎ、男に手渡した。「それ、ちゃんと洗わずに乾燥させとくのよ?」

「洗わずに?」

キョトンとする肥満体男の問いに、ルイズは呆れたようにため息をついた。

「あんた、どこの田舎平民よ? 洗うわけじゃないじゃない。そのショーツに、濃厚なくっさい精液がたっぷりと染み付いてんのよ? そのまま乾燥させると精液がカピカピになって匂いがさらに強烈になり、その香ばしいザーメン臭を嗅ぐのが何百年も続く女性貴族の嗜みよ。勉強になったかしら?」

無知な中年男のために貴族の常識を事細かくレクチャーし終わると、部屋のドアがノックされた。

『ミス・ヴァリエール。シエスタです』

ドアの向こうから女性の声が聞こえ、ルイズは「入ってちょうだい」と入室を許可した。

「失礼致します」

ドアが開くと、メイド服を着た黒髪の少女が銀のトレイを持って入ってきた。

胸元の生地を押し上げる大きな膨らみから巨乳であることが窺い知れた。中年男が露骨に胸に視線を送っていると、少女——シエスタは柔らかに微笑みながら軽く会釈した。

肥満体全裸男にきちんと挨拶したいところだが、今最優先にすべきは貴族であるルイズへの奉仕のため、また後日に後回しすることにした。

「では、ミス・ヴァリエール。拭かせていただきますね」

シエスタが持ってきたトレイには湯気を立たせた蒸したタオルが置かれていた。

トレイをテーブルの上に置き、蒸したタオルを手取る。肩幅に開いたルイズの足元に跪き、「失礼致します」と一言言ってから、精液で濡れた股間を拭き始めた。

大きな尻の谷間や、ラビアまでしっかりとタオルを押し付け、中年男の黄ばんだ体液を残さず拭き取る。

「…終わりました」

シエスタが報告すると、ルイズは満足げに頷いた。

「ご苦労さま。ご褒美にその豚の精液がついたタオル、好きにしていいいわ。舐めても良いし、嗅ぐのも良いし、オナニーに使っても良いわ」

「あ…ありがとうございます! ミス・ヴァリエール!」

一介の平民へのあまりにももったいない褒美に、シエスタは嬉しそうに微笑んだ。精液がついたタオルを大事そうにトレイの上に置くと、ルイ

ズに深々と頭を下げてから部屋を出ていった。

中年男と二人っきりになると、ルイズは肘掛け椅子に腰掛けた。

「さて、と」

肘置きにゆったりと手を置き、優雅に足を組む。スレンダーな体型の割に、太ももはむっちり肉付けが良い。黒のニーソックスに包まれた美脚が重なり合っただけで中年男は鼻息を荒くさせる。

足をジロジロと見てくる視線をあえて無視し、ルイズは厳かに言葉を紡ぐ。

「自己紹介するわ。私はルイズ・フランソワーズ・コリコ・リマンコ・ヴァリエール。名門セックス貴族、ヴァリエール公爵家の三女。16歳で、ヴァージンよ」

足を組み替え、顎をツンと上向きにする。鶯色の瞳が見下すように中年男を見据え、高圧的な女王のような風格を漂わせた。

「あんたの名前は…ああ、いいわ。チンポ奴隷のあんたに名前なんか意味ないものね。あんたのことは、『豚』とか『チンポ』とか『おっさん』とか適当に呼ばせてもらうわ」

酷い物言いだ、サディストでもマゾヒストでもある中年男は逆に興奮し、下卑た表情で笑った。

その反応にルイズは満足げに頷き、話を進める。

「次に…あんたは何も知らないだろうから、使い魔について説明するわ。使い魔の役割は大きく分けて二つ。一つは身の回りの雑用、もう一つはご主人様である私の性欲処理よ」

ルイズは足を組み替える。

「私、結構性欲強いよ。初めてオナニーを覚えたのは六つとき。それ以来、ほぼ毎日オナってきたわ。指でオマンコほじくり回したり、机の角を擦りつけたり。もちろん、杖でオナったこともあるわ」

ルイズは実際に自慰で使った杖を取り、不敵に笑った。

「この杖には、私のオナニーライフ10年分のマン汁がたっぷり染み付いているわよ。…舐めたい？」
中年男がぶんぶん首を縦に振ると、ルイズは小さく笑った。

「ただで舐めさせてあげないわ。私を満足させることができたら、よ。…柵からグラスを出して」

命令された中年男は近くの柵の戸を開け、ワイングラスを取り出した。

テーブルの上に置くと、ルイズは続けて命令を下した。

「豚。オナニーして、ザーメンを注ぎなさい。あんたのその金玉の中にぐつつぐつつに煮えたぎったチンポミルクザーメン、テイスティングするわ」
そう言ってルイズは組んでいた足を勢いよく大きく広げた。

10年間も自慰行為でほぐしてきた、瑞々しく未成熟な女性器を中年男に見せつける。

「オカズよ。シコリなさい」

鼓膜が蕩けそうな声音で命令されると、中年男は包茎ペニスの皮を剥いた。

パンツコキのときに恥垢をほとんど削り取られたが、まだ少なからず亀頭に白いカスが残っている。

恥垢特有の生臭い匂いを漂わせながら長太い竿をしっかりと握り、抜き始めた。

「はあッ、はあッ…ルイズちゃん…ルイズちゃん…ルイズちゃんのおまんこ…」

中年男はルイズのラビエを視姦しながら熱心に自慰行為をする。

すると、あることに気が付いた。股間の恥骨辺りが大きく盛り上がり、大陰唇の脂肪が豊満に膨らんでいた。

「そう、モリマンよ」

中年男の思考を読んだかのように、ルイズは不敵な笑みを浮かべた。

「正常位で突くとき、すっごく気持ち良いと思うわ。腰を打ちつけるたびにぷりっぷりでふかふかのロリ恥丘、ロリラビエがクッションになって、ぷにんっ♡ ぷにんっ♡ って柔らかく押し返すわよ？」

ルイズの淫語は続く。

「私のオまんこ…毛、無いでしょ？ これは剃ってるんじゃないのよ？ 生えていないの。わかる？ 天然パイパンまんこってことよ。いつ生えてくるかわからない、ツルツルのロリまんこ」

ルイズは股間に手を伸ばした。

びらびらとした小陰唇を指でぐっと広げ、隠されていた中身を見せた。

綺麗なピンク色の果肉が多量に分泌された愛液で光沢し、湯気を立たせながらひくひくと微動している。

「ほら、見て？ 16歳貴族のヴァージンマン肉。トロトロでホカホカ…キツキツでぷりぷり…。10年間もほじって、ほじって、ほじりまくったオナニー中毒まんこ。始祖ブリミルに誓って、ハルケギニア大陸一縮まりの良いロリ名器であることを保証するわ」

火に油を注がれたかのように中年男は鼻息を荒くしながら、ペニスをガシガシ抜く。シュッ！ シュッ！ と肉を擦る音を響かせ、先端からカウパー腺液が溢れ出る。

股間にぶら下がっていた睾丸が徐々に上がっていき、射精の準備を整えていく。

そんな中年男をさらに追い込むため、ルイズはトロついた秘肉を見せつけたまま言葉を紡いだ。

「豚…このオまんこはあんただけのものよ。朝一番に寝ている私をクンニで起こし、食事をしているときもクンニ、授業を受けているときもクンニ、おしっこをした後もクンニ。そして、夜になったら…」

ルイズはそこで一旦言葉を区切り、妖艶な笑みを浮かべた。

「——ベッドの上で、激しいオマンコセックス：♡」

ペニスを抜く中年男の手の動きが超加速する。

「味わわせてあげるわ。このルイズ・フランソワーズ・キツキ・ツマンコ・ヴァリエールの、未成年オマンコの感触を♡ フレッシュでジュシー、タイトで克蘭キーなパーフェクトマンコ♡ 挿れ放題、出し放題のリベラルマンコ♡ あんたのデカチンポでぶりっぶりのポルチオを突きまくった後に、私の赤ちゃん部屋に何度も精子を注ぎ込んで孕ませてちょうだい♡」

「うっ…！ ル、ルイズちゃん…！ 出、出るうっ！」

ついに限界を迎えようとする中年男はワイングラスを手に取り、ポウル部分に尿道を向けて激しく抜く。

中年男の自慰行為を見つめながら、ルイズはにやりと笑って言った。

「いきなさい、豚。」

それが引き金となり、中年男はワイングラスに精液を注ぎ込んだ。

ぶりゅっ！ ぶりゅっ！ と音を立て、白濁色の体液がグラスに溜まっていく。

「くっ…ふうっ…！」

精液を出し切った中年男は熱い息を吐き、ルイズにグラスを渡した。

女性器を見せるために大股を開いていたルイズは椅子に深く座り直し、足を組む。姿勢を正しくして、ワイングラスの足の部分を手に取った。

「テイステイング、させてもらおうわ」

まずは見た目のチェック。

グラスを自分の視線まで上げ、傾け、色を見る。

「…少し黄ばんでいるわね。でも、黄ばんでいる方が私は好みよ。しっかりと熟成されている証拠だし、その方が香りが濃厚だからね。…次は」

グラスを小刻みに揺らすと、精液がぶるぶる震える。

「ぶるっぶる。液体というより、ゼリーねこれ。良いぶるつき具合」

ルイズは満足げな笑みを浮かべ、ワイングラスを鼻に近付けた。

瞳を閉じ、中年男の搾り立て精液の匂いを嗅ぐ。

「すう…ふう…」

静かで、深い鼻呼吸。生臭い香りを肺にまで取り込むように、何度か鼻で吸引する。

「……………」

一旦鼻から遠ざけ、目を閉じたままグラスを回す。空気を含ませて香りを立て、再び鼻に近付ける。
「すうー…ふう…すうー…ふう…」

中年男の睾丸の中で生成された体液の臭みを入念にチェックするルイズ。
一分以上の時間が経過すると、ゆっくり目を開けた。

「香りも合格。鼻が孕んでしまうかのような、濃くつくっさい精液よ」

見た目、香りは特に問題無し。次は肝心の味だ。

ルイズはグラスに口をつけ、ゆっくりと傾ける。

一口分だけ精液を口に入れ、糸を引きながらグラスを放す。

「……………」

香りのときと同様に目を閉じ、口内に神経を集中させた。すぐには飲み込まず、小さな舌の上で精液を転がす。
味、舌触り、温度、鼻から抜ける香り、粘付き等に異常がないか細かく審査する。

唾液が混ざり合い、味が薄くなったところで、

「…くっく」

ゆっくりと飲み下し、喉越しを確かめる。

しばらく沈黙した後、また精液一口分を口に含み、同じ作業を繰り返した。

やがて全ての精液を飲み込むと、ルイズはハンカチで口元を拭って静かな口調で評価を下した。

「特に問題は無いわね。だけど、点数をつけるとしたら70点。まあまあ精液よ」

ルイズは中年男に厳しい視線を向けた。

「この私のチンポ奴隷なら、100点満点のチンポミルクを搾り出せるようもっと精進しなさい。…だけど、まあ…」

厳しい顔から一変、ルイズは顔を赤らめながらそっぽを向いた。

「色も黄ばんでて、ぶるっぶるだし？ 臭くって、味も美味しかったから？ まあ、ご褒美はあげても、良くってよ…？」

「ル、ルイズちゃん…」

中年男が瞳を潤ませながら感銘を受けていると、ルイズは顔を真っ赤にしながら睨みつけた。

「か、勘違いしないでよね！？ 私はあんたのザーメンなんか全然満足してないんだから！」

照れ隠しでそう怒鳴りながら中年男に杖を投げ渡した。

「ほら、私の10年分のオナニーマン汁が染み付いた杖よ！ 舐めるなり、嗅ぐなり好きにしなさい！」

言うが早い、男は興奮した面持ちで杖を手に取り、早速匂いを嗅いだ。

10年間もの長い歳月をかけてルイズの愛液がたっぷり染み込んだ自慰杖。致した後は綺麗に洗ってしまったため、特に匂いはしなかったが、実際に自慰に使っていたことは紛れもない事実であり、それだけでも中年男を発情させることができた。匂いを嗅いだ後は、舐めしゃぶる。舐め残しがないよう、杖全体に舌を這わせ、異臭の唾液を塗していく。

ルイズが何食わぬ顔で唾液に濡れた杖を振るう姿を想像し、中年男は再び肉棒を滾らせ始めた。

「ふっ、もうチンポ復活させた。包茎のくせに、デカさと精力さは一級品ね」

すっかり再勃起した皮被りの肉棒を見てニヤリと笑い、ルイズは優雅に椅子から立ち上がる。

「さて…豚。セックスするわよ」

ローファーとニーソックスしか履いていないほぼ全裸の少女は、腰に手を当てながらそう言い放った。

「チンポ汁の次は、チンポそのものを確かめてあげるわ。固さ、大きさ、形、耐久力…全てをね。私のぷりぷりマンコを満足させられなかったら承知しないんだから」

次の瞬間、貴族の令嬢らしくふんぞり返っていたルイズが大きく体勢を変えた。

長い後ろ髪をかき上げると共に、腋の下を大きく広げる。

16歳美少女の綺麗な腋が、しつとりと汗ばんでいた。元々腋汗をかきやすい体質らしい。美腋に浮かぶ汗の一粒一粒が明かりに照らされて、てらてらと光沢している。

そして、香ばしい柑橘系の香りが中年男の鼻腔をくすぐった。濃密なフェロモンがたっぷり含まれた、未成年の甘酸っぱい腋汗の匂いが部屋中に広がる中、セクシー且つ気品のあるポーズを取る絶世の美少女は不敵に微笑んだ。

「さあ、しつかりと目に焼き付けなさい」

ニーソックスに包まれた足を大きく広げながら腰を落とす。

股間をガニ股に開き、滑らかな腋を無防備に晒したその姿は、誇り高い貴族とは程遠い下品なものだった。

しかし、ルイズの表情は至って真剣であり、羞恥の色は全く無い。そして、その下品な大勢のまま腰を大きく回し始めた。

「驚いたかしら？ 無知なあんたに説明してあげる」

腋見せガニ股ポーズで腰を振るう16歳の美少女は、常識の無い中年男にレクチャーする。

「これは何千年も前からハルケギニア全土に伝わる、ド・スケベ・チン・コキピッチの舞いよ。性交前に男性に見せつけ、チンポの勃起を促す神聖なるセックスマナーダンス。やり方は何種類もあるわ。とにかくチンポにセクシーダンスを以て、礼儀を尽くすことが重要な。たとえ短小でも包茎でも、オチンポマナーを守れない人間にセックスする資格なんてないもの」

そして、ルイズは腰を振りながら真摯な口調で口上を述べた。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ホカホ・カマンコ・ヴァリエール。我のぷりぷりマンコの純潔を、汝の包茎デカチンポに捧げることをここに誓わん。されば、私の恥丘、私の膺、私の子宮を以て汝の雄々しく、逞しいオチンポに——祝福を」

性交前の腋見セガニ股ダンスと淫語の祝詞奏上によって、中年男のペニスが痛々しいほどに勃起し、早くも先端からカウパー腺液が溢れ出る。それを満足げな眺めたルイズは中年男に指示を出した。

「ふっ、チンポバッキバキね。ほら、私のベッドに仰向けになりなさい。光榮に思うことね、私のオマンコヴァージンを脂ギッシュデブのあんたに捧げてあげるわ」

中年男は巨体に似合わぬ身軽さでベッドに上がり、仰向けに寝転がった。

塔のようにそそり立つ巨大な肉棒に、ルイズは躊躇なく顔を近付ける。

「ったく、何てデカさよ。包茎のくせに生意気じゃない？」

嬉しそうに口角に吊り上げながらそんなことを言うと、小さな手で竿を握り、包皮を剥いた。

ずるっと大きな亀頭が顔を出す。白いカスがこびりついた亀頭にルイズは鼻先を近付け、ゆっくりと目を閉じる。鼻の穴を大きく広げ、恥垢まみれの亀頭の匂いを嗅ぎ始めた。

「すうー、ふう…すうー、ふう…すうー、ふう…」

精液のテイステイングのときと同様に、審査するかのようになペニスの匂いを入念にチェックするルイズ。

一方、中年男は生殺し状態だった。亀頭にルイズの生暖かい鼻息が当たって心地よいが、大した刺激ではない。

今にも暴発しそうなペニスが我慢汗を垂らしながら、早くイきたいのにイけないもどかしさにびくびくと震えた。

「すうー、ふう…すうー、ふう…」

だが、匂いチェックは終わらない。亀頭に鼻息を当ててはいるが、決して触れようとしなない。

地獄とも言える数分間の長い時間が経過すると、ルイズはようやく目を開いた。

「ん〜、チンカスくっさ…♡ 腐ったチンポみたいな匂いね、こんなくっさいチンポで私のヴァージンを奪おうだなんてド変態」

「ル、ルイズちゃん…も、もう、挿れたいよ…」

とうとう痺れを切らした中年男が涙目で懇願した。

醜男がペニスを勃起させながら救いを求めてくる姿に、ルイズは自分の下腹部が熱くなるのを感じ、獲物を前にした肉食獣のようにぺろり…と舌舐めずりした。

「良いわよ。いっぱいパンパンして、あんたのくっさい包茎デカチンポを逆レイプしてあげるわ」

ルイズは中年男に跨り、自身のラビアにペニスを近付けた。竿を軽く握り、恥垢まみれの亀頭を幼い肉穴へと狙いを定める。「行くわよ」

腰を落とす。

小陰唇に亀頭が触れ、ずぶずぶと挿入されていく。

「んっ…！」

ルイズは一気に腰を落とした。

誰にも侵入を許したことの無い無垢な膣がペニスを完全に飲み込むと、下腹部で何かが弾けた。

「くっ…！」

破瓜の痛みにルイズは顔をしかめた。

破れた膜によって、二人の生殖器の接合部に一筋の血が流れる。

「ル、ルイズちゃん、大丈夫…？」

中年男が心配そうに見上げると、プライドを傷付けられたようにルイズは怒鳴り声をあげた。

「う、うっさい！ 余計なお世話よ！ そ、それより、どうなのよ？ 私のオマンコの感触は…？」

自信なさげな顔で軽く腰を揺ると、中年男はおほっ…と呻いた。

「す、すごいよ…あったかくって、キツくって…すぐに出ちゃいそう…」

一度射精していなければ、挿入された瞬間に精液を暴発させていただろう。瑞々しく、締めりの良い肉穴の感触にペニスが蕩けそうになる。

中年男の言葉にルイズは自尊心を満たされ、破瓜の痛みに耐えながら笑みを浮かべた。

「ふふっ、そうでしょ？ あんたのチンポが啞え込んでいるのはハルケギニア一のキツキツぷりぷり名器よ。私のロリマンコの感触、締めりを…

しっかりと確かめなさい」

そう言って、腰を上下に揺すり始めた。

ぬぼっ…ぬぼっ…とゆったりとしたテンポでペニスを出し入れさせる。

「はっ…！ あっ、あぐっ…！ ル、ルイズちゃん…！ 出ちゃう…！」

膣があまりにもキツく締めつけてくるため、中年男は顔中に脂汗をかきながら情けなく射精を訴える。

次の瞬間、ルイズは豚男の頬を平手打ちした。冷たい目で見下ろしながら言葉を紡ぐ。

「出すんじゃないわよ、豚。私が良いと言うまで出したら、もう性欲処理なんか頼まないから」

「そ、そんな…はぐっ！」

全体重をかけて腰を打ち下ろされ、中年男は呻き声をあげた。

早くも痛みがなくなつたかのようにルイズの腰振りが速く、滑らかになる。彼女が腰を打ち下ろすたびにベッドがギシギシと軋む音を立てる。「ふっ、騎乗位って乗馬とそんなに変わらないわね。私のライディングテクニクで、あなたのチンポをいっぱいコキコキしてやるわ…!」ルイズは余裕の笑みを浮かべると、とても先程まで生娘とは思えないほどの腰振りで中年男を責め立てた。

男からしたら快樂の拷問だ。幼い膺でペニス心地よく扱かれてはいるが、主人の許可が下りるまでは射精を我慢しなければならない。

——はあ…豚チンポ、気持ちいい…良いフィット感…♡

自身の肉穴をゴリゴリほじってくるペニスの感触に、ルイズは満足げに腰を振り続けた。

中年男との身体の相性は抜群だ。だが、決してそれを言葉にはしないし、顔にも出さない。

あくまでも自分が主人であり、豚は性欲処理のただの肉奴隷だ。

常に自分の立場が相手より上であることをしっかりと躰げなければならぬ(ただ褒めるのが照れ臭くて言えない気持ちもあるが)。

「ほらッ、ほらッ…! どうかしら? 未成年のぶりぶりマンコの感触。トロトロで、ホカホカでしょ?」

ルイズは腰を振りながらブロンドの髪をかき上げ、汗ばんだ腋の下を全開にした。

腋見せガニ股ダンスの時よりも腋汗の量が明らかに増えており、16歳の香ばしく甘酸っぱい腋汗の香りが部屋中に広がっていく。視覚でも嗅覚でも、ルイズは中年男を犯した。

「んっ、んっ…! 随分と気持ち良さそうで、苦しそうね豚」

太った中年男に跨り、優雅に腰を振るう16歳の美少女は何度も髪をかき上げながら言葉を紡ぐ。

「私の魔法の系統は、オマンコ。男を誘惑し、ペニスから精液を搾り取ることを得意とするドスケベメイジ。私のオマンコ魔法で、あなたの金玉から徹底的にザーメンを搾取してあげるわ。…ふんッ!」

次の瞬間、ルイズの腰振りが暴力的になった。

パンッ!! パンッ!! パンッ!! パンッ!! パンッ!!

高速且つ、激烈なピストン運動。互いの腰がぶつかり合うたびに乾いた肉音が鳴り響く。

ルイズが勢いよく腰を打ち下ろすと、90cmの豊満ヒップがゼリーのようにぷるぷると豪快に波打つ。

「がッ…! あッ…! ル、ルイズちゃ、ん…!!」

「ふんッ! ふんッ! ふんッ! まだッ! 出すんじゃないわよ豚ッ…!」

ルイズは汗ばんで異臭を放つ肥満体に躊躇無くのしかかった。両腕を掴み、一切の抵抗を許さずに激しく腰を振るう。

「ほらッ! ほらあッ! これがオマンコ魔法の一つ、『種搾りプレス』よッ! 外出しできると思わないことねッ! あなたのくっさくて、ぶ

初めての性交を経験した貴族の少女は蕩けた顔で甘い呼吸を繰り返し、中年男の胸に顔を埋めた。

「ル、ルイズちゃん、気持ち良かった：？」

男が問うと、ルイズは我に返り、慌てたように上体を起こした。

「ま、まあ：あんたとの初セックスは悪くは、なかったかな：？も、もちろん、こんなので満足なんてしないんだから！」

そっぽを向きながら、そんなことを言うルイズだが、頬が赤くなっている。

言葉とは裏腹に、中年男とのロストヴァージンセックスは文句の付け所が無いほどに満足している様子だった。

「ほら、さっさとベッドから下りて！ あんたは藁で寝なさい！」

ルイズは照れ隠しで怒鳴りながら腰を上げた。ぐっちょおお：と白濁色の糸を引きながら男根を抜くと、詮が抜かれたかのように精液が溢れ出る。

ルイズに何度も脇腹を小突かれた中年男は大人しくベッドから退散し、言われた通りに床に敷かれてある藁に寝転がった。

それを一瞥し、ルイズは着用していたローファーとニーソックスを脱ぎ、生まれたままの姿で毛布を被った。

「服、ちゃんと洗濯しといてね。あと、私を起こすときはクンニをしなさい。良いわね？」

洗濯はともかく、未成年の女性器を舐めしゃぶるなど願ってもないことなので中年男は素直に頷いた。

男の返事を確認したルイズは灯りを消し、枕に頭を預けた。